早坂眞理著『近代ポーランド史の固有性と普遍性――跛行するネイション形成――』

福元健之

本書の著者である早坂眞理は、ポーランド分割後の亡命者研究や、リトアニアやベラルーシにおける史学史研究を専門とする。東欧のみならず、フランスやオスマン帝国をも視野に含める研究に従事してきた早坂は、本書出版前に、ポーランドにおけるイェジィ・スコヴロネク教授記念学術賞の特別功労賞を受賞した（本書の「あとがき」を参照）。本書は、国際的に評価される研究者の手による近代ポーランド史論であり、後述のように、ナショナリズムの論じ方について、歴史学の立場から貢献する作品である。以下では、まず本章の概要を紹介したい。なお、ここで言及する頁数は、特記なき限り本書のものであり、引用中の角括弧も著者によるものである。

序章「ポーランド分割をめぐる歴史空間」では、本書の目的が提示される。早坂によれば、一八世紀後半におけるポーランド分割とフランス革命は、国際秩序の再編という文脈のなかで同時代的に起きたものであり、ポーランドは、日本（明治維新）やイタリア（リソルジメント）と、一九世紀という時代や国民統合という課題を共有していた。また本書の議論では、オスマン帝国も重要な位置を占める。このような同時代性を認識しつつ、その中でのポーランド史の固有性を把握しようとする本書は、大貴族アダム・イェジィ・チャルトリィスキ公が率いた亡命者集団（以下、チャルトリィスキ派）の活動を縦軸に、世界史的な動向やヨーロッパ国際関係史を横軸として、近代ポーランド史を描きなおすものである。この試みが有する意義は、第二章「ポーランド歴史思想史における悲観論と楽観論」にて明らかにされる。近代ポーランド史学の中心には、分割の原因を国内の混乱に求める悲観論か、侵略者に求める楽観論かの対立がある。前者は、クラクフ歴史学派が確立し、カトリック聖職者のヴァレリアン・カリンカがその祖とされる。後者は、ワルシャワ歴史学派にみられるもので、歴史家ヨアヒム・レレヴェルの仕事を受け継ぐものである。それぞれの学派には別々の政治的信念が反映されたことを指摘したヤン・アダムスの古典的研究[1]によれば、前者には君主政史観が、後者には共和政史観が親和的であった。カリンカのあとに悲観論を引き継いだミハウ・ボブジンスキは、戦間期に至っても影響力をもち、ネオ・クラクフ学派が台頭した。これは戦後ポーランドの歴史学が乗り越えるべき対象となり、再び楽観論（共和政史観）が支配的になるなかで、クラクフ歴史学派を用意したチャルトリィスキ派研究は停滞したのであった。そのため、チャルトリィスキ派→クラクフ歴史学派という系譜の再評価を通じて近代ポーランド史を捉えなおすことの意義は大きいといえる。

第三章「アダム・イェジィ・チャルトリィスキ公のヨーロッパ構想」では、ナポレオン戦争期からウィーン体制成立をへて、一八三〇年一一月蜂起までの時期のアダム公が論じられる。親ロシ

ア的なリベラルであったアダム公は、アレクサンドル一世期に政治家としての手腕を発揮し、ポーランドへの譲歩を引き出そうとした。アダム公がツァーリに献呈した著作『ロシアが採るべき政治システム』では、正義と倫理が強調され、勢力均衡を前提に各国民の独立と自由を認めるべきであることが明記された。そしてポーランドの統治については、コンスタンチン大公を国王として迎え、ロシアと恒久的同盟を結ぶと定められた。このようにアダム公には、現実政治を冷徹に分析する一方で、カントらの国際平和論に啓発された側面があった。ニコライ一世がコンスタンチン大公からポーランド王位を剝奪しようとしたことに端を発する一一月蜂起の過程でも、アダム公はまずは外交努力による事態の収拾を図る。しかし、最終的には亡命を余儀なくされ、アダム公によるポーランドとロシアの関係構想はここで大きく変化し、ロシアとは区別されるポーランドのスラヴ思想が準備された。

続く第四章「大亡命：対決の時代――アダム・チャルトリィスキ公 vs. ニコライ一世」は、亡命地（主にフランス）にて形成されたチャルトリィスキ派と、その最大のライバルであったポーランド民衆派協会（以下、民衆派）の政治路線を整理する。レレヴェル→ワルシャワ歴史学派の系譜が評価された戦後歴史学では、民衆派に関心が集まった。彼らはアンリ・ド・サン＝シモンら初期社会主義からも影響を受け、急進的な共和主義の政治綱領を掲げたのである。これに対して、アダム公率いるチャルトリィスキ派は現実路線を模索し、内部には老人派と青年派が形成され、青年派の指導者は、アダム公の甥ヴワディスワフ・ザモイスキ伯であった。彼もまた老獪な政治家であり、民衆派との競争を有利に進めるべく、即時蜂起を主張するマウリツィ・モフナツキをあえて登用した。『故国と革命』（後に『五月三日』[2]と改称）は、一見すると民衆派と同じ共和主義を掲げているかのようにみえるが、変革の主導者はあくまでシュラフタ（貴族）なのだとされた。さらに、レレヴェルと対峙し、チャルトリィスキ派に政治的指針を示した歴史家に関して、早坂は、第五章「チャルトリィスキ派とカロル・ホフマンの歴史研究」で考察する。ホフマンは、シュラフタが権利を濫用したために国家が破滅に陥ったと捉え、強力かつ賢明な国家による上からの改革を正当化したのであった。

こうして自らの進むべき方針を定めたチャルトリィスキ派は、アダム公の国際戦略にそって地中海の向こう岸にまで活動を広げる。第六章「亡命ポーランドの東方バルカン政策」で描かれるように、チャルトリィスキ派のスラヴ思想には、ポーランド人がウクライナ人やバルカン半島のスラヴ諸民族からなる連邦制国家を指導するというメシアニズム的色彩があった。そして、続く三論稿において、早坂は、チャルトリィスキ派を支えた個性的な人物たちに光を当てる。青年派によって組織されたイスタンブル東方機関は、共通の敵ロシアに対抗するために、オスマン帝国のスルタンと友好関係を築くべく画策したが、そこで指導的地位にあった人物をとりあげたのが、第七章「ミハウ・チャイコフスキのウクライナ思想」である。ウクライナ生まれのチャイコフスキは、スルタンから信頼をえようとムスリムに改宗し、コザック連帯を率いてクリミア戦争に参加した。第八章「〝ロシア人はスラヴに非ず〟――フランチシェク・ドゥヒンスキの人種理論」は、疑似科学的な言説を動員してロシアに「遊牧民文化」や「アジア」や

「野蛮」といった属性を付与し、チャルトリィスキ派のスラヴ思想を補強しようとした思想家を扱った。人種概念の操作がトルコ人にも及んだことは、第九章「トルコ・アーリア主義――コンスタンティ・ボジェンスキの政治思想」に明らかである。早坂によれば、オスマン帝国はポーランド近代史において非常に重要な場であり、この理解は、チャルトリィスキ派研究を通じてより説得力のあるものになった。

やがて、アダム公の国際戦略は、クリミア戦争において失望に満ちた総決算を迎える。戦争でロシア帝国が敗北しても、ポーランドの独立は実現せず、一八六三年に起きた一月蜂起の挫折によって、この状況は決定的となった。このことは、ザモイスキ伯の側近カリンカをして、分割の原因はシュラフタ自身にあるという歴史を書かせ、ここに、チャルトリィスキ派からクラクフ歴史学派へと連なる系譜が成立したのである。

他方、民衆派のその後については、第一〇章「ヨーロッパ共和主義運動の預言者――ルドヴィク・ミエロスワフスキ」、第一一章「共和主義からロシアとの融和へ――ヘンリク・カミェンスキの転向」、第一二章「ロシア・ジャコバン派の影の組織者――カスペル・ミハウ・トゥールスキの革命独裁論」で論じられた。また、第一三章「有機的労働論――農民解放をめぐる論争から」および、第一四章「歴史は生活の師――道化師たちの精神的指導者ヴァレリアン・カリンカ」の二論稿は、近代化を志向する貴族の農地改革をめぐる議論を扱う。一見すると、これまでの流れにはそぐわない考察にみえるが、地主貴族であるシュラフタにとって最も切実な問題は、いかなる条件のもとで農民に自由を与えるのかであり、チャルトリィスキ派は各地の地主にも受け入れられる改革案を捻出しなければならなかった。第一〇章からの考察を通じて、本書の提示する歴史像は豊饒性を増した。

終章「世界史に連動するネイション形成」にて、早坂は、アダム公と後期水戸学の論客である会澤正志齊を例に、再び世界史的同時代性について述べる。かつて皇国史観のイデオロギー的支柱として受容され、戦後に批判された会澤とは異なり、アダム公は独立の立役者として描かれ続けた（三五八頁）。しかし早坂によれば、「迫りくる外圧を跳ね返すために天皇制の再構築を訴える会澤の姿勢は、神聖同盟に挑戦して独立運動をどう展開するかに腐心し、君主権力の強化を旗印に国民統合を果たそうとしたチャルトリィスキ派の戦略と通じるものがあったと考えられる」（三六〇頁）。日本でもポーランドでも、あるいは近代世界において、ナショナリズムは問題を累積し、跋行してきた。本書の副題に英語およびポーランド語で「諸国民の形成」とあることにも、著者の意図を感じる。世界史の中で個々の固有性を把握し、比較しながら、それらの相対化を図ることこそ、本書の主題なのだろう。

評者は、これまでにも早坂の研究について論じたことがある。[3] そこで取りあげた諸研究と重なる議論も部分的にはみられるが、[4] 新たに明らかにされる豊富な事実や解釈によって、本書は全体として独立した作品となっている。早坂は、『ベラルーシ――境界領域の歴史学』彩流社、二〇一三年、および『リトアニア――歴史的伝統と国民形成の狭間』彩流社、二〇一七年において、各地のフォークロアがいかに収集され、編集され、国民化されたのかという諸過程から、国民史の形成を論じた。最初の著作『イスタ

ンブル東方機関』や本書第七章の主人公であるチャイコフスキは、故郷ウクライナにおける民間伝承を収集し、自身でも民話をもとにした小説を書いた人物である。本書は、フォークロアを主要な考察の対象とはしていないものの、ナショナリズムの問題を扱う点でこれまでの研究との連続性がある。歴史家としての早坂の眼は、それぞれの国民史における論争点を剔抉し、繰り返される歴史観の相克を、より広い文脈のもとで、他者となる他の国民史と並べながら自覚的にたどる。本書の意義は、このような国民史を批判的に対象化する歴史思想史の叙述方法を具体的に提示したことに求められる。これは、ポーランド史のみならず、広くナショナリズム研究に歴史学から貢献する試みであるといえるだろう。もっとも、対象の細部をめぐっては三つの疑問を評者は抱いた。

一点目は、サナツィア体制の解釈をめぐる問題である。サナツィア体制とは、ユーゼフ・ピウスツキによる一九二六年五月のクーデター事件をきっかけに成立した政治体制である（第二章註二九を参照）。皇国史観を克服する使命を背負った日本の戦後歴史学のように、社会主義時代のポーランド史学が、戦間期のネオ・クラクフ学派史観に挑戦したという構図は一定の説得力がある（二三頁）。しかし、三四―三五頁によると、戦間期の体制とネオ・クラクフ学派を関連づけたのは先述のアダムスであったとされるが、一九六一年に公表されたこの理解が未だに有効なのかどうかについては、体制をどのように捉えるのかという点も含めて、検討の余地があろう。「戦間期のポーランドの農民運動［エンデツィア］を基盤とする、疑似ファシズム体制と呼ばれたサナツィア体制」（三六二頁）との記述もあるが、これは体制と学派との関係を説明するものではなく、さらなる疑問すら浮かぶ。エンデツィアとは、ピウスツキの宿敵ロマン・ドモフスキ率いる国民民主党勢力を指す。[5] したがって、エンデツィアもサナツィア体制も、それぞれ農民層の支持をえて、反セム主義を鼓舞したことは事実であっても、エンデツィアがサナツィア体制の基盤となったとはやはり考えにくい。また、サナツィア体制は、ドイツやイタリアのような大衆の動員や統率には成功しなかったという点などをもって、これらと区別するために権威主義的と規定されることが一般的であろう。[6] 本書では言及されないが、[7] 一九一八年における独立の中で楽観論が影響力を広げたとの見解もあり、一九二六年以後に楽観論が悲観論からの反撃にあったのだとしたら、その過程や要因に関する記述も欲しかった。ないものねだりを続ければ、早坂がクラクフ歴史学派第二世代として注目するボブジンスキに関する独立した章があれば、ここでの問題は生じなかったのではないかとも想像される。

二点目の問題は、系譜的理解と、より柔軟な解釈の両立である。本書の議論を揺るがせるものではないが、ホフマンやカリンカ、老人派と青年派という重要なキーワードをめぐって、やや図式的な議論が散見された。ホフマンとチャルトリィスキ派の協力関係は、実際には一八四九年までに終わっており（一〇五頁）、以後ホフマンは独自の著述活動に入った。しかしそれでも早坂は、一八六〇年代のホフマンも「チャルトリィスキ派の政治路線を継承していた」（一一八頁）と断定する。いわば前期ホフマンがチャルトリィスキ派→クラクフ歴史学派の系譜と密接であったのだとしても、後期ホフマンは前期の活動を基盤に、彼独自の「西方の

汎スラヴ主義」を展開したと解釈することも可能であるように評者には読めた。また、クラクフ歴史学派の祖カリンカは、確かにザモイスキ伯から重宝されたものの、じつは悲観論の記念碑的著作『スタニスワフ・アウグストの統治の最期の数年間』（一八六八年）をもってチャルトリィスキ派での立場を失うようである（三三一、三五〇頁）。とすれば、チャルトリィスキ派とクラクフ歴史学派との間にも、連続性だけではなく、断絶をもみる必要があろう。さらに、系譜的理解を強調するあまり、チャルトリィスキ派内部における老人派と青年派の差異を覆い隠してしまった点も指摘できる。先行研究者のハンデルスマンは青年派を「亜流」として軽視したが（八〇頁）、イスタンブル東方機関の創設に関わり（九四―九五頁）、ホフマンやカリンカという才能を発見した（一〇五、三三二頁）青年派は、本書ではむしろ中心の座を占める。先に述べたチャルトリィスキ派からクラクフ歴史学派への連続と断絶のなかで、老人派と青年派との差異がいかなる意味をもったのか、評者としては、ぜひとも知りたかった。

最後の三点目は、近代化、あるいはリベラリズムの担い手に関する問題である。マチェイ・ヤノフスキの論稿では、東欧のように中産階級の発展に乏しかった地域における近代化の推進者には、貴族と並んで、知識人（インテリゲンツィア）も挙げられた[8]。ヤノフスキは、一九世紀ポーランドのリベラリズムに関する通史的著作を書いた歴史家であり、実際にそこでも貴族と同様に知識人の役割も重視される[9]。チャルトリィスキ派をとりあげた本書は、前者から「東欧型リベラリズム」をも把握しようとするが（第五章）、やはり後者にもしかるべき目配りが求められよう。本書で知識人への言及がないわけではない。しかし、政治の担い手として「中小士族［地主］出身のインテリゲンツィアに指導的役割が期待された」（二九九頁）とあるように、知識人にはシュラフタに従属するもの以外の役割は与えられない。このことは、本書が貴族の政治路線を左右する農民問題を重視し、また時期的には一月蜂起前までを考察範囲にしていることに起因するのだろう。知識人の増加は一九世紀後半から本格化し、世紀末には彼らのプロレタリアート化が問題にされるまでになった。マグダレナ・ミチンスカによれば、農奴解放後の時代においては、知識人の社会的出自を貴族層のみに求めるのは誇張された理解である[10]。とはいえ、貴族の子弟があまり選びたがらなかった医師の出身階層については、一月蜂起前から既にシュラフタ（四五％）と並んで、都市民（四四％）も多かった[11]。一八四〇年代に、ドイツ語からポーランド語に知識人概念を輸入したとされるのは哲学者のカロル・リベルトだが、彼は手工業職人の家に生まれたものの、プロイセン政府から奨学金をもらって大学に進学し、ヘーゲルに師事できた。そのリベルトが、高等教育（専門知識）によって民族を導く存在として知識人を描いたとき、彼は身分や家系にとらわれない社会を志向したと考えられる[12]。

早坂によれば、「自由主義の選択は、社会変化は不可避とみて譲歩する以外に旧来の地位を守る道はないと判断した結果にほかならない。この路線は一月蜂起後、ガリツィアの道化師たち［クラクフ歴史学派の分身］の保守主義において貫徹されたとみるルドヴィコフスキの解釈は、ポーランドの歴史学界で定説化されているとみてよい」とされる（一〇二頁）。しかし、このときレッ

ト・ルドヴィコフスキは保守主義の研究に従事しており、また社会主義期という時代的制約を受けていると考えれば、彼の解釈がいまなお有効であるとするのには、やはり議論の余地があろう。[13] 今日のポーランドには、先述のヤノフスキからさらに次の世代にあたる研究者が現れている。[14] 彼らの知見を踏まえながら、東欧やロシア、オスマンにおいて保守的な貴族の路線と、右派から中道、左派までを幅広く包摂する知識人からの路線とが、どのように交錯しながら近代化、あるいはリベラリズムを推進したのかを考えることは、重要な論点をなしている。

以上、様々な問題を提起したが、本書が広い意義のある研究であるだけに、あえて自由に述べてきた。誤解などあるかもしれないが、その場合には著者にはご海容を請いたい。

① 参考までに書誌情報を記しておく。Jan Adamus, *Monarchizm i republikanizm w syntezie dziejów Polski* (Łódź: Łódzkie Towarzystwo Naukowe, 1961).

② 一七九一年五月三日憲法に由来して、この日づけは愛国的な意味をもった。同憲法については、白木太一『近世ポーランド「共和国」の再建――四年議会と五月三日憲法への道』彩流社、二〇〇五年を参照。

③ 福元健之「国際政治の舞台裏から――早坂真理『イスタンブル東方機関――ポーランドの亡命愛国者』」藤原辰史編『歴史書の愉悦』ナカニシヤ出版、二〇一九年、四三-五二頁。

④ 早坂真理『イスタンブル東方機関――ポーランドの亡命愛国者』筑摩書房、一九八七年。同『ウクライナ――歴史の復元を模索する』リブロポート、一九九四年。同『革命独裁の史的研究――ロシア革命運動の裏面史としてのポーランド問題』多賀出版、一九九九年。本書では挙げられていないが、早坂眞理「ニコライ・カレーエフとクラクフ歴史学派――一九世紀後半のロシア史学とポーランド史学の「一致」について」『ロシア史研究』三二、一九八〇年、四三-五五頁。同「ポーランド史学思想史におけるクラクフ歴史学派批判と最近の研究動向」『東欧史研究』四、一九八一年、三二-四八頁もある。

⑤ さしあたり、宮崎悠『ポーランド問題とドモフスキ――国民的独立のパトスとロゴス』北海道大学出版会、二〇一〇年を参照。

⑥ 古典的だが、以下を参照。Janusz Żarnowski (ed.), *Dictatorships in East-Central Europe 1918-1939: Anthologies* (Warsaw: Ossolineum, 1983).

⑦ Jolanta Kolbuszewski, "Między wsparciem narodu a krzewieniem magalomanii - interpretacje dziejów Polski z okresu I wojny światowej," [w:] *Łódź w czasie Wielkiej Wojny*, pod red. Jolanty A. Daszyńskiej (Łódź: Księży Młyn, 2012), 13–19.

⑧ Maciej Janowski, "Marginal or Central? The Place of the Liberal Tradition in Nineteenth-Century Polish History," [in:] Iván Zoltán Dénes (ed.), *Liberty and the Search for Identity: Liberal Nationalisms and the Legacy of Empires* (Budapest and New York: Central European University Press, 2006), 266.

⑨ Maciej Janowski, *Polish Liberal Thought before 1918* (Budapest and New York: Central European University Press, 2004).

⑩ Magdalena Micińska, trans. by Tristan Korecki, *At the Crossroads 1865-1918: A History of the Polish Intelligentsia*, Part 3 (Frankfurt am Main: Peter Lang Edition, 2014), 26.

⑪ Ryszarda Czepulis, "Lekarze urzędowi (1832–1862)," [w:] *Społeczeństwo Królestwa Polskiego*, t. 3, pod red. Witolda Kuli (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1968), 56.

⑫ Jerzy Jedlicki, trans. by Tristan Korecki, *The Vicious Circle 1832-1864: A History of the Polish Intelligentsia*. Part 2 (Frankfurt am Main: Peter Lang Edition, 2014), 93-95.

⑬ 本書で参照されるルドヴィコフスキの文献は、Rett R. Ludwikowski, "Kilka uwag o polskim liberalizmie XIX w.," *Przegląd Historyczny* 67-4 (1976), 643-655; Id., *Konserwatyzm Królestwa Polskiego w okresie międzypowstaniowym (z rozważań nad ideologią i polityką)* (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1976).

⑭ 例えば、マチェイ・グルヌィやカミル・シュニェホフスキらは、今後ますます重要な研究をするだろうと評者は考えている。彼らの近著は、以下を参照。Kamil Śmiechowski, *Łódzka wizja postępu. Oblicze społeczno-ideowe "Gońca Łódzkiego", "Kuriera Łódzkiego", "Nowego Kuriera Łódzkiego" w latach 1898-1914* (Łódź: Księży Młyn, 2014); Maciej Górny, trans. by Antoni Górny, *Science Embattled: Eastern European Intellectuals and the Great War* (Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2019).

（A5判　四九八頁　彩流社、二〇一九年一二月
税別五八〇〇円）

（日本学術振興会特別研究員PD）